

# 現代メキシコにおける都心部の公共空間整備 - 整備手法の時代的変遷 -

西村 亮彦<sup>1</sup>

<sup>1</sup>正会員 工博 国土交通省 國土技術政策総合研究所 社会資本マネジメント研究センター  
緑化生態研究室 (〒305-0804 茨城県つくば市旭1番地, E-mail:nishimura-a92ta@nilim.go.jp)

本研究は、現代メキシコにおける都心部の公共空間整備について、整備手法の時代的変遷を明らかにすることを目的としている。まず、20世紀半ば以降のメキシコ国内17都市における公共空間の整備事業について、事業内容の横断的なレビューを行い、都市改造、広場の再生、歩行者空間の整備、都市景観の整備、露店整理、場所のコンテクスト再編、6つのカテゴリーを抽出した。次に、各類型ごとに整備手法の時代的な変遷を整理するとともに、国際的な都市デザインの潮流が与えた影響と、メキシコ独自の展開に対する考察を行った。

**キーワード:** Mexico, Public Space, Urban Design, Urban Regeneration, Historic Center

## 1. はじめに

### (1) 本研究の目的

都市の拡大・成長とともに様々な問題を抱えてきた都心部の再生は、世界共通の課題である。メキシコにおいても、20世紀半ば以降、旧市街の再生に向けた様々な取り組みが行われてきた。一連の取り組みを歴史研究の視点から体系的に整理することは、メキシコにおける都市デザインの歴史を明らかにするだけでなく、メキシコの豊かな都市空間のエッセンスを学ぶという意味においても、有意義な取り組みであると言える。

本研究は、現代メキシコの都心部における公共空間の整備手法について、その時代的変遷を明らかにすることを目的としている。その考察においては、国際的な都市デザインの潮流が与えた影響と、メキシコ独自の展開に着目した分析を行うものとする。

### (2) 関連研究の概況

わが国におけるメキシコの建築・都市に関する研究は、その蓄積が極めて乏しい。植民地時代の都市計画や、ルイス・バラガンをはじめとする代表的な建築家の設計思想に関する研究は散見されるものの、近現代における都市の計画・設計手法を包括的に論じた研究は存在しない。

一方、メキシコ国内でも、建築分野における20世紀の歴史研究がかなり早い段階から進められてきたのに対し、都市分野では20世紀、特に1950年代以降の歴史研究が大幅に遅れていることが指摘される。また、メキシコでは、都市デザインの取り組みが全国各地で実践してきたの

に対し、その理論については個人的、かつ断片的に語られてきたため、都市デザインが一つの研究領域として確立していないことが指摘される。

## 2. 研究の方法

### (1) 現地調査

メキシコ・シティを拠点に、17都市における現地調査を実施した。現地調査では、都心部におけるフィールドワーク、及び各都市の建築・都市史の有識者に対するヒアリングを行うとともに、メキシコ国立自治大学をはじめとする国内主要大学の図書館、ICOMOSメキシコ図書館、国立歴史人類学研究所の各州オフィス、各州・各都市のアーカイブ等において、文献調査を行った。

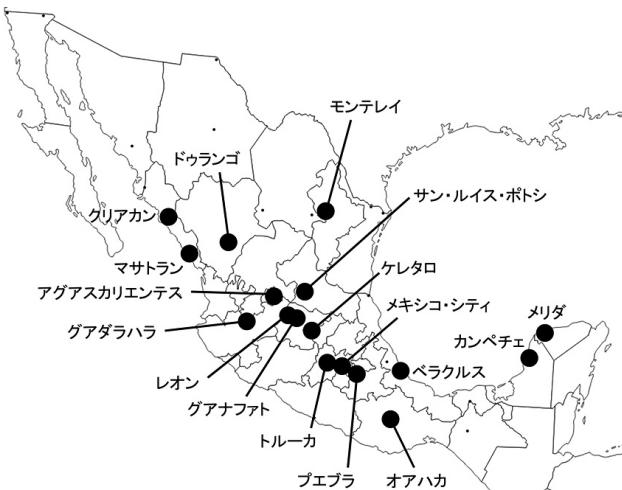


図-1 調査対象地

また、各都市の代表的な事業について、計画・設計に携わった人物に対するヒアリングを行うとともに、各州・各都市の歴史アーカイブ、及び設計者の個人アーカイブ等において、事業の詳細が分かる文献及び図面の収集・整理を行った。

## (2) 類型化・考察

(1)で収集した事業の横断的なレビューを行い、都心部における公共空間の整備手法を、都市改造、広場の再生、歩行者空間の整備、都市景観の整備、露店整理、場所のコンテクスト再編の6つのカテゴリーに整理した。次に、各類型の時代的な展開を整理した上で、国際的な都市デザインの潮流との関係と、国内における独自の展開について考察を行った。

類型化・考察を行うにあたり、メキシコ国内外の大学等において都市デザインの教育に携わった人物、都市デザインの実務に携わってきた建築家・都市計画家、行政職員として公共空間整備の計画・設計に長年携わってきた人物等、公共空間整備の有識者に対するヒアリングを行った。

## 3. 整備手法の時代的変遷

以下、20世紀半ば以降のメキシコにおける都心部の公共空間整備について、整備手法の時代的変遷を各類型ごと整理し、考察を行った。

### (1) 都市改造

1920年代、メキシコ革命の混乱が収まると、大都市を中心に都市の拡大成長が始まり、人口増加とともに拡大する各種需要に対応した都市の構造再編とインフラ整備が求められた。全国各地の都市において、街路の拡張、公共施設の建て替え、都市公園の建設等、都市空間のドラスティックな改変が始まつた。建物の取り壊しや街区の改変を伴う一連の整備は、合理的な進歩を教義とする機能主義的モダニズムによって肯定された。

1951年、モダニズム運動の中心であったCIAMの第8回会議において、「都市の核」をテーマに都心部の再生が議論されると、世界各地で都市改造を通じた都心再生の取り組みが動き出す。CIAMにおける都市改造の議論は、汎アメリカ建築会議を通じて中南米諸国にも広がり、1968年には「都市改造」をテーマとしたボゴタ大会が開催されている。こうした動きは、マリオ・パニ、ドミニゴ・ガルシア・ラモスといったモダニズム建築家によって、メキシコに持ち込まれていったものと考えられる。

19世紀末から20世紀初頭にかけて整備された公共空間は、ポルフィリオ・ディアス大統領時代（1876～1910

年）に普及したフランス式庭園が主流であったが、20世紀半ばには、都市改造のコンセプトの下、ビスタやパースペクティブを用いたモダンなデザインの広場が各地に誕生した。特に、州政府や市庁舎に面した屋外空間では、政府関連の式典会場にふさわしい、権威的な空間が整備された。また、メキシコでは伝統的にオープンスペースの多くが、常設・仮設の市場として利用されてきたが、衛生上の問題や景観・社会秩序の混乱を理由に、市場の郊外移転が進むと、跡地の多くがモダニズムの影響を受けたシンプルな広場空間へと姿を変えいった。

1960年代に入り、歴史的な建造物や地区に遺産的価値が見出されると、地域住民や知識人によって都市改造に対する反対運動が各地で動き始める。メキシコ・シティでは、1960年に旧市街を東西に貫くTacuba通りの拡張計画が持ち上がるが、学識者、政治家、メディア、市民の反対運動によって計画が差し止められると、同様の動きが全国へと拡大していった。

しかしながら、こうした反対運動の多くは各地域ごとに偶発的に展開していくため、欧米のナショナル・トラストやシビック・トラストのように、全国的に足並みを揃えた保存運動が展開するには至らなかった。そのため、アグアスカリエンテス市のExpoplaza（1990～1991）やプエブラ市のPaseo San Francisco（1993）等、1990年代に入ってからも、都心部における大規模な都市改造が引き続き行われた。



写真-1 都市改造によって新設された広場（グアダラハラ市）

（出典：Gallo, Fernando, La Plaza Tapatía, Gobierno de Jalisco, Guadalajara, 1982）

### (2) 広場の再生

ポルフィリオ・ディアス大統領時代、国の近代化が進む中、メキシコでは数多くの広場が、キオスクを中心据えた整形式の庭園として整備され、市民の憩いの場としての広場のあり方が確立する。しかしながら、1940年代から都市の拡大成長が加速化すると、既成市街地における都市インフラの維持管理が追いつかず、都心部の広場や街路の多くが駐車場と化していった。

その後、1960年代に入り、都心部の環境悪化が問題視され始めると、市民の憩いの場としての広場の役割を取

り戻し、地区環境の改善を図る取り組みが各地で起こる。従来の庭園としての様式は崩すことなく、噴水、キオスク、ベンチ、照明、舗装、植栽の補修・更新や、教会をはじめとする広場周辺の歴史的価値の高い建造物の修復が行われた。植民地時代以来、地盤沈下に悩まされ続けてきたメキシコ・シティでは、地中に埋没した教会のファサードを復元するため、多くの教会前広場で地表レベルの復旧作業が行われた。また、広場の整備と併せて、広場を囲う街路の一部を歩行者専用化することで、周囲の建造物と広場のアクセス改善に取り組むケースも数多く見られた。

都市公園や並木通り等の比較的大きい緑地の再生が始まったのも、この頃である。時代とともにニーズが変化する広場とは異なり、専らレクリエーションのための空間である都市公園や並木通りでは、元々の空間構成は変更せず、施設更新を通じたアメニティの向上が専ら取り組まれた。

旧市街における広場の再生は、旧市街保存・再生の一環として、今まで継続的に取り組まれている。また、1980年代を通じて全国的に旧市街の整備が進むと、今度はその周縁に位置する「準」歴史地区についても、これを歴史的、文化的遺産として評価する動きが生まれ、1990年代以降、旧市街の周縁部において、広場の再生プログラムが全国各地で進められてきた。



写真-2・3 1960年代に再生された広場（メキシコ・シティ）

（出典：La Ciudad de México No. VI: Sus Plazas Primera Parte, Artes de México, núm. 109, 1968.）

### (3) 歩行者空間の整備

20世紀半ば、多様な機能が集中する都心部では、モータリゼーションの進展を受け、交通渋滞、騒音、大気汚染、路上駐車が深刻化していた。こうした状況の中、都心部に歩行者専用街路を整備し、歩行者の回遊性を向上させるとともに、環境改善を図る動きが生まれる。欧米では1970年代、ヤン・ゲールやポールハンス・ペーター等によって、歩行者空間に関する理論と実践が展開し、都市デザインの展開に大きな影響を与えていた。こうした動きは、マリオ・シェットナンやジャン・バサントら、

欧米の大学でアーバンデザインを学んだ都市デザイナーによって、メキシコにも持ち込まれた。

1960年代後半に散見される初期の取り組みでは、試験的に短い区間を歩行者専用化していたが、1970年代に入ると、歩行者専用街路のネットワークを構築する取り組みや、中心部の一画を歩行者専用地区に指定する取り組みが全国各地で始まった。1980・1981年には、国立芸術研究所（INBA）によって国際会議「歩行者による都市の利用」が開催され、国内外の建築家・都市計画家が歩行者空間の整備手法について議論を交わし、歩行者空間整備は一大ブームを迎えることとなる。

その後、加熱し過ぎた歩行者専用街路のブームは、1980年代半ばに転換期を迎える。メキシコ・シティをはじめとする大都市では、都心部の広範囲を歩行者専用地区に指定する野心的な提案が計画されることは、お蔵入りになっていた。歩行者専用化を行う上で、地区の車両交通と経済活動へ支障を来さないことが必須条件となるが、こうした条件を満たせなかった街路が、再び車両交通へ解放されるケースも徐々に現れていった。

その後、21世紀を迎える、全国各地で包括的な旧市街再生プログラムが動き出すと、教会や広場をはじめとする地区の重要な施設をひとつつなぎに連結する形で、歩行者専用・優先道路の整備が再び進められてきた。「歩行者回廊（Corredor Peatonal）」と呼ばれる一連のプロジェクトは、都心部における回遊性の向上に加え、後述する都市景観の整備や場所のコンテクスト再編と併せて行われることで、地区の性格を強化・更新するための軸線づくりに一役買ってきた。また、近年、歩行者空間の整備と併せて、自転車専用レーンの設置やコミュニティサイクルの導入も各地で進められている。



写真-4 1970年代の歩行者専用街路（メキシコ・シティ）

（出典：Remodelación Urbana: Ciudad de México 1971-1976, Departamento del D.F., México D.F., 1976.）

### (4) 都市景観の整備

1960年代、イタリアをはじめとする欧米諸国で、歴史的都市の保全運動が始まると、いち早くメキシコにも伝播する。1964年のベネチア憲章締結を受け、翌1965年に

設立されたICOMOSメキシコ支部は、歴史保全の分野において国際社会とメキシコをつなぐパイプとして、重要な役割を果たしてきた。また、1972年に世界遺産条約が制定されると、同年、メキシコでも「考古学的、歴史的、芸術的モニュメント及びモニュメント地区に関する連邦法」が制定され、国立歴史考古学研究所（INAH）を中心とした歴史的モニュメント地区の管理体制が確立する。

1970年代に入ると、歴史保全運動の高まりを受けて、都心部における修景事業が全国各地で展開していく。初期の修景事業は、看板や庇をはじめとするファサード付属物の撤去・統一を通じた、復旧・復元を目的としていた。その後、1980年にメキシコ・シティ旧市街が国の歴史的モニュメント地区に指定されると、歴史保全の動きが一気に加速する。1990年代、文化遺産を観光資源として活用する動きが高まると、観光庁は修景マニュアルを作成するとともに、精力的に講習会を開催し、全国各地で都市景観の整備を推し進めた。

モダニズム以降のメキシコ建築界では、塗装をしないで素材そのままの色を見せるのが、「モダン」な建築表現として定着していたが、1980年代に歴史保全の気運が高まる中、コロニアル建築における色彩利用に関する研究が進み、ファサードの塗装が見直されていく。その後、旧市街の観光地化が進むにつれ、建物の構造、内部空間、使われ方などには一切介入せず、外観のみを整備する表層的な取り組みが増え、後年「ファサード主義」的との批判を浴びるところとなる。

こうした反省も踏まえ、近年、包括的な旧市街再生プログラムの下、ファサードだけでなく広場や街路も含めた、都市景観の一体的な修景整備が進められている。前述した歩行者回廊の整備において、通りのイメージを刷新するための効果的なツールの一つとして、修景整備が行われることも少なくない。また、公共事業における市民参加の重要性が高まる昨今、メキシコ・シティをはじめ、市民参加を取り入れた修景事業も少しづつではあるが、現れている。



写真-5 1980年代の修景事業（メキシコ・シティ）

（出典：Trueblood, Beatrice, Fundación Mary Street Jenkins, Fundación Mary Street Jenkins, 1988.）

## （5）露店整理

メキシコにおいて、路上における物品販売は、古くは植民地時代以前に遡る、伝統的な商業形態である。常設・仮設の市場の整備・運営は、植民地時代から今日に至るまで、都市政策における最重要課題の一つであり続けてきたと言える。20世紀に入ってから、メキシコ国内の多くの都市が一極集中型の都市構造を保ちながら拡大成長を遂げたため、20世紀半ばには既設市場の収容能力を超える商業活動が都心部に集積し、市場一帯は露店が無秩序に並ぶ混沌とした状態を呈し始める。

1970年代の景気後退を受け、都市部における農村人口の流入が加速すると、今度は市場周辺のみならず、都心部の広場や街路の多くが露店商によって占拠されていった。露店商の増加は、歩行者の自由な移動を妨げるだけでなく、各種インフラの損傷・劣化、公衆衛生の悪化、騒音、屋内型店舗との不公平な競争、違法商品の流通等、様々な社会問題を深刻化させた。1970・80年代、当局は郊外に新しい市場を建設することで、都心部における露店の一掃を図ったが、一時的な対処療法に過ぎず、強制的な移転の後、しばらくすると露店商が都心へ戻ってくるという、イタチごっこに終始する始末であった。

1990年代に入り、郊外における市場の建設が根本的な解決にならないことが分かった当局は、より現実的な政策へと方向転換を図る。都心部の空き家や空き地を商業施設として整備し、露店商に低額で貸与する取り組みが各地で始まり、露店整理に一定の効果を上げてきた。また、旧市街の観光地化が進む中、露店商を屋内に収容するのではなく、観光資源として活用するべく、露店商を特定の広場や街路へ戦略的に再配置し、市が指定した設備を用いて指定の商品を販売させる取り組みも、この頃から始まった。

露店商の活動は、当局のイニシアチブに大きく左右されるため、活動の範囲や規模は極めて流動的で、その歴史的展開も都市によって大きく異なり、一般化して語るのは難しい。モレリア市のように一掃に成功したケースもある一方、グアダラハラ市のように露店商の活動を当局が全くコントロールできていないケースも少なくない。



写真-6 露店整理による景観統一と観光地化（ケレタロ市）

（筆者撮影）

## (6) 場所のコンテクスト再編

メキシコにおいて都市の旧市街は、歴史的建造物が密集する貴重な観光資源であると同時に、行政や商業、ビジネス等の機能が集中する場所でもある。こうした地区的性格を強化するべく、2000年代から、特定の観光活動・経済活動の促進を目的とした、公共空間の整備事業が出現する。また、芸術や音楽をはじめとする文化的な活動を新たに挿入、ないし促進することで、衰退した地区的活性化を図るという都市再生の手法は、欧米では既に確立された手法であるが、2000年代後半から、メキシコでも同様の動きが少しずつ見られるようになってきた。

場所のコンテクスト再編の代表的な事例として、オープンカフェの設置が挙げられる。例えば、メキシコ・シティでは、ロペス・オブラドール知事の時代(2000~2005年)にGante通り、続くマルセロ・エブラルド知事の時代(2006~2012年)にRegina通りにおいて、通りの歩行者専用化と併せて沿道の飲食店によるオープンカフェの設置が許可され、観光地としての性格が一層強まった。このようにオープンカフェの設置は、歩行者専用道路や広場の整備と併せて取り組まれることが多い。

もう一つ、コンテクスト再編の代表的な事例として、マリアッチ広場の整備が挙げられる。メキシコの各都市には、マリアッチ（メキシコの大衆音楽）の奏者が集まる一画があり、週末の夜にもなると一体は大勢の市民で賑わいを見せるが、近年、こうした大衆娯楽を観光資源として利用する動きが高まっている。例えば、メキシコ・シティでは、マリアッチ広場として知られるGaribaldi広場の全面改修が2009~2010年にかけて行われ、舗装の更新、沿道建築物の修景、ストリートファニチャーの更新に加え、広場内部に観光の目玉となるテキーラ・メスカル博物館が建設された。



写真-7 整備後のマリアッチ広場 (アグアスカリエンテス市)  
(筆者撮影)

また、文化的なコンテクストの挿入を通じて地区再生に効果を挙げた取り組みの代表例としては、メキシコ・シティにおけるRegina通りの整備が挙げられる。沿道に学校や劇場が多数立地する地区的ポテンシャルを活かし、

これらの施設および広場等の公共空間を歩行者専用街路でつなぎ、施設更新と沿道建築物の修景を行うとともに、街路空間をアート作品の展示に利用することで、地区的文化的活動の促進を図っている。既存の住居や商店を残しつつ、アーティストや学生を中心とした若者向けのアパートや飲食店が進出することで、地区の再生に大きな効果を上げている。



写真-8 歩行者回廊による地区再生 (メキシコ・シティ)  
(筆者撮影)

## 4. おわりに

本研究では、メキシコの主要17都市を対象に、都心部における公共空間の整備手法を6つのカテゴリーに整理した上で、その時代的変遷を整理した。（図-2）調査の結果、現代メキシコにおける公共空間の整備手法は、基本的には国際的な都市デザインの潮流に影響を受けながら、メキシコの都市に特有の条件に対応する形で展開していくことが分かった。

本研究の課題として、事業年度の古いプロジェクトについて、計画・設計に携わった人物が存命でない等の理由で、一次資料の収集が困難だったことが挙げられる。また、国際的な都市デザインの潮流が、どのように受容され、独自の展開を遂げていったのか、より明確に論じるためには、他の中南米諸国とメキシコを比較することが必要と考えられる。以上の2点を今後の課題として、引き続き調査・研究を進める予定である。

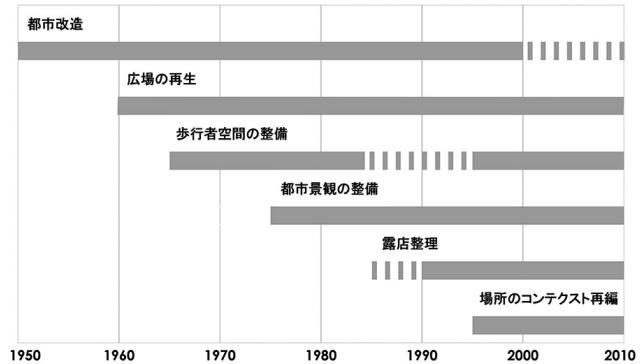


図-2 現代メキシコにおける公共空間の整備手法の時代的変遷

**謝辞**：本研究を行うにあたり，在外研修の助成を頂いたユニオン造形文化財団様、多大なご指導を頂いたメキシコ国立自治大学・美学研究所のピーター・クリーガー博士、そしてヒアリング調査及び資料提供にご協力頂いた全ての方々に、この場を借りて厚く謝意を表する。

### 参考文献

- 1) 西村亮彦：Humanscape から読み解く都市空間の公共性 -メキシコ・シティ旧市街ファン・ホセ・バス広場を例に-, pp. 167-176, 土木学会景観・デザイン研究講演集, No. 11, 2015.
- 2) 西村亮彦：メキシコ・シティにおける公共交通指向型都市開発の展開に関する研究, 土木計画学研究・講演集, No. 51, 2015.
- 3) 西村亮彦ほか：メキシコ・シティ旧市街における地区再生に向けたオープンスペース整備の計画及びデザイン手法, pp. 213-222, 土木学会景観・デザイン研究講演集, No. 7, 2011.

(2016. 4. 11 受付)